死神の代理人やってます

くーやん屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死神の代理人やってます

【Ｎコード】
Ｎ７１９０Ｓ

【作者名】
くーやん屋

【あらすじ】
とある事情で死神の仕事を代理している柳瀬冬夜。普段は地味で真面目でなんの取り柄もない彼に死神の仕事が務まるのか？
人間と死神を両立させる彼の日常と非日常が始まる！

プロローグ

人は死ぬ時に何を考えるか。たぶんそれに一つの答えなんか存在しない。自分のこと、家族のこと、恋人のこと、金のこと、叶わぬ夢のこと…。数えきれない想いの中で命の炎は消えていく。
一度消えた炎は二度と輝きを取り戻さない。それがこの世の摂理、ルール、秩序、理。誰にもこの法則を妨げることはできない。
できるとすれば、それはすでに神の所業。
人有らざる崇高な存在の行い。
死を司る神の責任。

気に入らない。
気に入らないな。
僕にはまったくもって関係無いそれらがすごく気に入らない。

その責任とやらのために僕の日常は非現実的なものへと変換されてしまった。
ほんの少しの間違いだと言われて。

強い姿に隠れた弱さ1（前書き）

久しぶりにこういうものを書きます。

良かったら感想ください！

強い姿に隠れた弱さ1

５月２１日〇〇県△△市の伊藤富子８９歳。
この人が今回のターゲットである。何のターゲットかと聞かれると誇れる声で言えるようなことじゃないが、あえて言ってしまうと今夜にでも死んでしまうという人だ。
死んでしまうと言っても僕が殺人を犯すとかそういうことではない。普通の一般人であり、かつ善良な一市民である僕が殺人などという非人道的なするわけがないじゃないですか。
僕はその人が死んだ後の処理をするだけですよ。

そのためにただいま漆黒の衣服に身を包んで屋根から屋根を高速で飛んで現場に向かってんだからさ。
でかい鎌なんかも持って我ながら奇抜な出で立ちだと思ってたりするんだけど。そんなの気にしてたらこんな仕事やっていられない。

ああ、そういえばまだ言ってなかった。

僕こと柳瀬冬夜（やなせとうや）は、ただいま死神の代理人をやってます。

◇

死神と言っても某漫画のように、でかい剣が出るわけでもなく、和製の黒装束を見に纏って化け物と戦うわけでもない。戦うこと自体は時々あるみたいだけど。着ているものと言えば真っ黒なフード付きトレンチコートだし、持ってる物も大鎌だ。どちらと言えば西洋的な死神のイメージがある。
そして死神の主な役目とは肉体と魂の切り離しだ。
人が死ぬと魂が肉体を離れるのは周知のことだと思えるが、自然と

離れるわけじゃない。肉体と魂は魂接という白い紐みたいなもので繋がれていて、それを切らない限り人は死なない。だが、これはある奴に聞いたことだが、この魂接に繋がったまま魂が肉体を離れている状態が続くのは本人にとって相当苦しいらしい。それは本当にどうしようも苦しみらしい。その魂接を切り、苦しみから魂を解放してやるのが死神の役目なんだとさ。

「…冬夜、遅い。急いで」

急いでいる僕をさらに急かす喋る青い火の玉が一つ。こいつはこの地区担当の元死神だったロキと言う。
そして僕を殺害し、死神の代理人にした張本人だ。
そう、僕は一度死んでしまっている。

何かの手違いと言うやつで俺を殺してしまうことになった死神ロキ。間違いの責任を感じたロキは死神の力を与えることで僕を生き返らせた。それによりロキ自身は力を失い火の玉に変化した。そして普段の生活には必要性皆無な先ほどのマニアック知識を僕に叩き込んだ。
ロキが言うには僕が生き続けるには条件がある。それは死神の仕事を力を失ったロキの代わりにこなし続けていくこと。そして千人を天に送ることで僕はその理不尽なしがらみから解放される。なぜ千人かと言うと、ロキのノルマが千人だからだ。
端から見れば理に叶った条件にも取れるが、何も知らずに殺されて生き返らせられた僕としては凄まじく迷惑なことだ。言わせてもらうと不幸の二文字である。

「急げ急げってロキは言うけどさぁ、ホントに今日こそ死ぬんだろうな？また急ぎ損なんて嫌なんだけど」

「つべこべ言わず走る。今日はちゃんと死ぬかもしれない…」

この会話からもわかるようにターゲットである伊藤さんはなかなかお亡くなりにならない。
彼女は僕が今向かっている病院にいたりするんだが、その病院のベッドで寝たきりになっている老人だ。
つまり彼女には寿命が来ているようだ。

でも彼女がなかなか亡くならないのは現代社会ならではの理由がある。

「着いたな」

ちょうどターゲットの部屋が見える向かいのビルの屋上へたどり着いた。
目を瞑ってベッドに横たわるターゲットが病院の窓の内側に見える。
その周りには医療機器だろうか、たくさんの機械が置かれ、その近くには見舞いに来た親族がターゲットを見守っている。
大人が二人、小さな男の子が一人、そして制服を身に纏った女性が一人。

ここにはもう何度来たことか。あれを見てると飽々してくると言うか胸の辺りが痛々しくなってくる。

ビルの手すりに肘をついて時が来るのを待つ。待っている間、僕が持っている大鎌の刃に月の光が反射して眩しい。

「あんなにチューブやらなんやらが付けられてどうなんだろうかね」

「…冬夜。あれらのおかげであの人間は生を永らえている。これも

人間の進歩」

人間の進歩ねえ…。
科学や医療の進歩は人間の生活をより良いものにするために重要なことだ。
けど、それが全ての人間にとって良いことかと言えばそうじゃないと僕は思うわけよ。

「僕だったら寝たきりになってもアレは嫌だ。たくさんの機械にチューブとかで繋がれて、苦しいのに無理矢理生かされてる」

「人間的に言えば生きてることに意味があるんじゃないの？」

「あんなの生きているなんて言えねえよ。本人が望んでいるのかもわかんねえのに僕は本人の望まない延命なんて絶対に認めないぞ！……なんてな」

「…急にどうしたの？バカになった？」

ロキが不思議そうに僕の周りを回り出した。

「いや、別に。言いたいこと言ってスッキリしたってところさ」

まあ、他人が苦しんでいようがどうなっていようが関係ないけど。
僕は自分のために仕事をするだけさ。

強い姿に隠れた弱さ2

僕は朝というやつが大嫌いだ。新しい一日の始まりって言えばそこそこ良くも聞こえるが、僕から言わせれば眠くて最も気だるい時間帯である。
それが我が高校の教室にいれば尚更だるくなる。
ちなみに学校にいる普段の僕は眼鏡を携えたインテリで真面目な高校1年だ。このキャラを保つことで様々な厄介事や面倒事を回避することができる。良いことも悪いことも無い生活がこの世で最も素晴らしいと僕は思うんだ。

そんな僕の主な死神時活動時間は夜。つまり今の何も無い時間帯は僕にとって無駄で素晴らしい時間となるのだ。その時間を有効的かつ効率的に利用するにはどうしたらいいか…。
それは特にやることもないから体力回復に専念することである。
と言うわけでこれより何もせず何も考えないという無我の境地に移りたい。
ぼーっとしていよう。

「おいおい、冬夜さんよ！朝からつまんねー顔してんなよなぁ。俺のテンションまでガタ落ちしちまうだろうが！」

僕の安息を邪魔してきたのは校則無視上等な茶色髪の浅井（あざい）という名の俺の同級生。自称超イケてる今時男子。中学からの付き合いだ。
うるさい奴だが決して悪い奴じゃない……と思いたい。

「お前のテンションが落ちようがどうでもいいが、つまらない顔は生まれつきなんだ。文句があるなら僕の先祖に言ってくれ。遺伝子レベルでどうにもならん」

「お前は高校生になっても相変わらず性根がひねくれてんなぁ。俺はこんな奴の友人やってるかと思うと自分が物好きな聖人かなにかに思えてくるぜ」

聖人か…。

浅井が知ってて言っているのかは知らないが、実際に聖人とやらはいたりする。死神を敵視して攻撃的で人の話を聞かなくて融通の利かない奴等で、死神の代理人である僕とは相容れない存在だ。僕も何度か会ったことがある。出会ってしまうと厄介だからもう二度と会いたくない。

「ところで柳瀬よ、お前みたいな性格ひん曲がった性悪根暗眼鏡の友人でいてやるような、お人好しで優しいそんな俺に慈愛の手を向けてみないか？数学の宿題を見せてくれ！」

「失せろ、たわけが」

そこまで救いを差し出すのは相当の気弱なお人好しかただの馬鹿だ。

「そ、そんなこと言わずに頼む！あの数学の鬼と呼ばれる三井に宿題をやってないなんて言えねえよ！」

「しようない、入学祝いテスト、昨日結果を返されたやつ。それの点数教えてくれたら見せてやらんこともない」

僕は自分より学力の低い人間を見下すのが好きです。

「いいぜ！つーか昨日からカバンの中身変わってねえから持って来てるぜ！」

まあ、そのテストのために入学前から勉強を見てやっていた。僕ほどじゃないにせよ、そこそこは点数を取れてるハズだ。

「どうだ！国語が２９点！！数学が１１点！！英語が８点！！そして社会が２１点！！理科が１８点だぁ！！」

「“どうだ”じゃねえ！オールレッドライン越えじゃないか！あんなに勉強教えてやっただろうが！」

「やれやれ柳瀬は分かってねえな。本当に大切なことは教科書や参考書に載っとらんのだよ。勉強が恋を実らせるかね？」

「お前は学生の本分をなんだと思ってるんだ？」

「恋ですとも！！」

「本分がどっちかなんて聞いてねえよ」

わかってはいたが、ここまで人の親切心を無にするとは。

「俺がここまで羞恥晒したんだ！宿題を見せてくれ頼む！テストの結果が相乗効果を生み出して鬼が死神へ進化しちまう！！！」

そうして浅井は土下座を眼前に晒した。

お前の言うその死神の代理人である僕が予想しなくともお前の死因は学力不足で決定だよ。それも面白い。だが、拒否したところで浅井がどこまでも食い下がって来やがるのは日を見るより明らかで鬱陶しい。

仕方ない…。

「見せてやるよ。そんかしなんか奢れよな」

「おお！！これぞ友情という名の絆だな！コンビニで唐揚げ棒（１０５円くらい）を奢ってやるよ！」

「おい、お前が言う絆ってものは１００円ショップにでも売られてるのか？」

鬱陶しい浅井を宿題で退け、その後の授業も滞りなく済ました昼休み。僕は放送室に来ていた。何故来ているかと言うと僕が放送委員会の一員だからだ。

めんどくさがりの僕が放送委員会になってしまったのはあるエピソードがあるんだが、それはまた次の機会に話してみたい。

今は放送委員会としての仕事をしなきゃならないし。

「さあ柳瀬君、そろそろ時間だ。放送用のＣＤをセットしてくれ」

この人は伊藤優子。二年生で僕の先輩だ。黒く長い髪が綺麗で顔立ちも整っている美人。さばさばした性格が助けて男女ともに隔てなく接することから非常に良い人間関係を創造する。非の打ち所が無い人だ。

こんな人の近くにいられるのは嬉しいことこの上ないんだが、女子柔道部の部長にして達人、素手で１０人以上の不良を完膚無きまでに叩きのめしたという伝説を持っている。

そして、今回のターゲットである伊藤富子の孫娘でもある。つまりはあの時病室にいた女性がこの人だ。ここ重要ね。

放送開始の時間が来てスイッチを入れると一年ほど前に流行った曲

が流れ出す。昼休みの放送は音楽を流すだけで他はすることがなかったりする。学校行事や業務連絡がない限りマイクもお役目御免である。
だから大体は特にすることも無く僕の昼休みは過ぎていってしまう。

「さて、やることも無くなったし紅茶でもつごうか」

そう言うと伊藤先輩は引戸からカップを三つ取り出した。何かと暇ができる昼休みの放送。どうせ暇になるならと先輩はティーセットとポットを放送室へ持ち込んだ。今ではこの時間にティータイムをたしなむのが日課になってしまった。
ここには現在、僕と先輩の二人。なら何故カップを三つも出すのかと言うとそれにはちゃんとした理由がある。

「ちわーすっ！伊藤先輩、ただいまあの浅井がやって来ました！」

これが理由だ。必ずと言って良いくらい昼休みに浅井はやって来る。いつも通りお約束の言葉を進呈してやろう。

「どうでもいいけど、委員でもねえ浅井が何故ここに来る？」

「そう簡単にラブコメ的ウハウハシチュエーションが実現できると思ってんじゃねえぞ？俺の目が黒い内はお前にリア充要素溢れた体験はさせん」

「今の僕なら貴様の言う黒い目を死んだ魚のようにできる気がする」

熱き拳を振りかぶろうと腕を天高く上げる僕を差し置いて浅井は伊藤先輩の隣へ座りやがった。

「伊藤先輩もこんな生き恥が眼鏡をかけたような男よりも俺みたいにイケてる男の方がイイッスよねっ！」

「貴様とは一度拳で語り合う必要がありそうだ」

もちろん僕は死神の力を最大限に活用する。

「ふふっ、そうだな。でも浅井君、人間は表面じゃないぞ？見えないところにこそ魅力があると私は思う」

「ダメです先輩！こいつの中身はどこまでも深淵の闇が広がってます！」

浅井が僕の株下げを終わらせない限り冗談抜きで終わりなき暴力を行使してもいいだろうか？

なんとなく時計を見ると昼休みも半ばを過ぎようとしていた。この放送は昼休みのＢＧＭとして一応最後まで流しておくため放送室から出ることができない。

眠くなくても欠伸が出てしまう昼下がりだった。

強い姿に隠れた弱さ3

「君たちは生きているってどういうことだと思う？」

カップに注がれた紅茶に口をつけていると突然伊藤先輩がそんなことを聞いてきた。さすがに僕も虚を突かれたようで一瞬ポカンとしてしまったが、すぐに我に返り言葉を返した。

「なかなか深いテーマですね。哲学的な話ですか？」

「そう考えてもらって構わないよ」

まぁ、なんで先輩がそんな話をし始めたのか僕には予想できるけどね。先輩の祖母が関係してるのだろう。彼女の病室にいる時の先輩は本当に辛そうな表情をしているからな。

「俺は生きているってことは青春してるってことだと思いますっ！俺の生涯は一生青春で彩られる予定ッスから！」

「ははっ、一生青春か。それはきっと楽しい人生になるんだろう。浅井君らしくていいじゃないか」

先輩は少し苦笑気味で言った。そして「柳瀬君はどうかな？」と訊いてきたから自分なりの考えを答えることにした。

「生きているってことは…受け入れるってことだと思います」

「ほぉ、これはまた味な見解をするんだな」

「まあ、生きるってことは結局その人生の中で起きたことを受け入れていかなきゃならないわけですし、それがもし辛いことでも逃げちゃいけない…と僕は思いますね」

我ながらピエロだと思う。これじゃ、先輩に足掻かずにお祖母さんの延命処置をやめてしまえと暗示してるようなもんじゃないか。外堀から攻めて行くってやつか？死神の代理人として早く仕事を済ませてしまいたいとか心の片隅で絶対僕は思ってるんだ。死の催促とでも言おうか。もう根底から僕の性格はひん曲がってるよこれは。

先輩に目をやると一瞬悲しそうな表情を浮かべたようにも見えたが、すでにいつもの余裕な雰囲気を出していた。

「辛いことでも受け入れるか…。それも大切なことかもしれないなぁ」

微笑んではいるが動揺しているんだろう。先輩にしては珍しく語尾が流れた。

いやはや、僕も変なところで観察眼を発揮するもんだよ。

「じゃあ私の考えも言った方がいいな。そうだな…簡単に言えば生きていることは幸せなことだと、私は思う。だが、人によっては生きていることが苦しいことでもあったりする。だからこそ人は時に死を考えたりするんじゃないだろうか。その時、自分が生きるか死ぬかを決断するが、結局は怖くなって何とか生きていこうと努力をする。柳瀬君が言うようにどんなに辛くてもだよ」

「ヤベッ、なんか話が難しくてよくわかんねえ」

「お前には縁の無いことだよ」

浅井にはまったく関係の無い話だろうからな。これからも関係無いことかもしれないけど。

浅井から先輩へ目を移すと普段の飄々とした表情とは打って変わって真剣なものであった。僕は一度だけ剣道部である先輩の試合を見たことがある。まるでその時の竹刀を持った時のようだ。

「よかったら一つ答えて欲しい。もしだ…もし君達が他人の命の選択を迫られるようなことがあったら…どうする？その人が生きるか死ぬかを自分が決めるようなことになったら君達ならどうする？」

なんか先輩らしくないな。やけに切羽詰まっているみたいだ。
そうか…たぶん先輩自身がそうした状況にあるのかもしれない。
まあ、その人が誰かと言えば考えるまでもなくお祖母さんのことだろう。
そして命の選択を委ねられているってか？

「よくわかんねえけど俺だったら生かしますね！生きてなきゃつまんねえし」

浅井らしい単純明快な答えだ。生きてこそってやつだね。さて、一方の僕はどう答えたものか…。
これだけ先輩が悩んでいるんだからしっかり答えるのが筋だよな。

「正直わかりませんね。僕はそんな責任を持つことも無いだろうし、持ちたくもないんで」

僕は考えるのを放棄してしまいました。死神の代理人になってから何人もの魂接を切ってきたもんで、命の選択をするもなにも仕事だ

から切らなければいけないってのがあるからなぁ。それで一人の人生が終わるわけだけど、やはり仕事だからとなんか割り切れてしまうし。魂接を切らなければ大変なことになるみたいだし。
まあ要するに、ある意味僕は特に何も考えずに人殺しをしているわけですな。
そんな僕に聞かれても困るわけですよ。

それから時が過ぎて外はもう夕日が山向こうに沈みかけていた。橙色に輝くトワイライトはどこまでも幻想的で…って、こんな小説的な言い方しなくても普通に夕方である。
夕方ということはもうすぐ夜になるというわけで、仕事の時間やってくるということだ。もちろん今日も伊藤富子さんの所に行くことになる。あの人が亡くならないと気軽に他の所へ仕事に行けないし。こんなこと言っては非常に不謹慎なのは百も承知だけど御家族には早々に諦めていただきたいもんだ。８９歳なんて大往生じゃんか。
これ以上何を望むと言うのだね？

「なぁロキ、そうは思わないか？」

手に持つ本に目を通しながら肩の辺りをふよふよ飛んでいるロキに言ってみた。すると僕の目の前まで移動して素っ気なく返事をしてきた。

「百年も生きられない人間の寿命なんか知らない。我々死神の寿命は千年以上もある。それに比べればすごい脆弱…」

「おい、僕もその脆弱な人間の一人なんだけど」

「冬夜は仮にとは言え死神の力を有している。多少のことで死んでしまうそこらの脆弱な人間と一緒にできない」

「なんかもう人間として見られてないなそれ。なんと言うか…最悪だ」

「…人間以上の力を手に入れたのに？」

「お前が勝手に僕を殺したからだろ！それにたまたま僕が死神の力ってやつに適応できたってだけじゃないか！平穏かつ平凡な生活をこよなく愛する僕にとっては迷惑にしかならないんだよ！」

「…冬夜怒ってる？それは……ロキが悪い。謝る」

火の玉だから表情なんて無いためパッと見わからないが気落ちしている。ロキの気持ちがなんとなくわかるのは一ヶ月ちょっとの付き合いになった僕の特技だ。こうなると責めるに責められなくなる。それにこいつは……まあ、今は言わなくていいことだ。

「別に怒ってないよ。僕の運が無かっただけだから気にするな」

「…そう？なら私は気にしな…っ！？」

ロキが一瞬でブレザーの内側に入ってきた。

「どうしたんだロキ？」

「近くにいる…」

「へ…？」

「聖人が近くにいる。…近づいて来る！」

死神の天敵である聖人の存在をいち早く感じたみたいだ。さて、今は人間だから死神の代理人であることがバレない限り何かされることはないが…。
どんなやつが来るのか。
聖人ってやつらはなんかそこら中にいる感じがするからなあ。だが、紺色ブレザーに灰色のズボン。真面目で大人しそうな雰囲気をかまず出で立ちに眼鏡。そして手にはブックカバー付きの小説（ライトノベル）。どこをどう見ても今の僕は完璧な一般高校生だ。下手に死神になったりしなければ何もないはず。
奴等もただの一般に手を出すほど野蛮じゃないだおごぉぉ！！？
く、首が締まる！
聖人の奴等め、ついに見境なく襲うようになったか！
「よぉ、数少ない友人を無下にした野郎がのこのこ歩いてるじゃねえか！えぇこらぁ！！」
毎日聞いてるような声だ。確か学校で無駄にうるさい奴…浅井だ。
「は、離せ…首が…首が締まってる」
「首一つで許せるかァァ！」
首一つでも締まれば死んじまう。言っとくがこいつは絶対聖人じゃない。
「浅井は罰で掃除やってたんじゃなかったのかよ」

「おうよ、んで終わらせたらお前は消えていた。理不尽な労働に涙を飲む俺を見捨てて行きやがった！」

「だったらその理不尽とやらを避けるために髪を治したらどうだ？頭髪検査に引っ掛かることもなく、時間外の掃除もしなくて済むようになるぞ？」

「この茶髪は俺のアイデンティティーだぁ！これじゃなきゃ俺じゃねえ！」

「なら三年間ホウキと放課後デートしてろ」

ふむ、お邪魔な浅井は一先ず置いておくとして、聖人の気配はどこに行ったんだろう？浅井が来たからロキは隠れてしまって聖人の気配が掴めない。

「……い！おい！無視すんじゃねえよ柳瀬！俺を空気扱いかこらぁ！」

まったく、やかましい奴だな。

「僕は今見ての通り小説を読んでるんだ。用があるならさっさと言え」

「だーかーら、伊藤先輩がなんか暗い顔してたなって話だよ。何かあったんじゃねえの？」

なかなか勘のいい奴だ。

先輩の顔が曇っていたのは僕にも分かっていたことだが、極力表情には出さないようにしていたみたいだし浅井は気づかないと思って

いた。

「そうか？気のせいだと思うけど？」

だが、今は余計な詮索をしないのが吉。素知らぬ顔をするのがいいだろう。

「お前の目は節穴か？その眼鏡は何のためについているんだぁ！」

何のためも何も低下した視力を補うためだろう。一度死んで死神の力を手に入れてからは視力が回復して今では伊達眼鏡にしている。自分は眼鏡を掛けた地味なキャラ。これを崩す気は一切ない。

「それに先輩と同じ柔道部の相沢だって先輩が元気ねえって言ってたんだ。お前、ちっさい頃から相沢と知り合いだろ？あいつの観察力が半端ねえって分かってんだろ？」

相沢とは女子柔道部に所属している同級生の女子・相沢千華のことだ。明るく元気で容姿も可愛い部類に入る……と、浅井のジャンク情報ブックにはご丁寧に記載されている。

僕の家のお向かいに住んでいて昔はよく（？）遊んでいた頃もあった。僕としても可愛い女子と知り合いであることを嬉しく思うところだが、相沢と遊んでいると少々元気がありすぎて昔から地味で真面目ぶっていたた僕は怪我ばかりしていた思い出だけが蘇る。

こんなこと言うとどこからか罵倒や石が飛んできそうな気もするが、僕的にはもっと大人しくしおらしい娘がの方がよかった。男なら誰しも自分に合いそうな好みの女の子を求めたいところだろ？

「何かあったとしても先輩の問題なら先輩自身がなんとかするしかないだろ？僕達が首を突っ込むことじゃない」

僕が正論をぶつけると浅井は落胆したように肩を落とし、側にあった石段に腰掛けて俯いた。

「なんかよぉ、悲しいっていうか淋しいよなぁ。お前がそんなに非情な奴だったなんてさ。友達の見たくない一面を垣間見たと言うかさ。こういう時は『俺達でなんとかしてやろうぜ！』とかさ、そういう人情とか燃えるような青春的なもんをさ、こう……っていねえしっ！？」

待てやあぁぁぁ、と叫びながら浅井が猛然と走って来るが軽くいなしておこう。今夜もまた仕事が始まるしな。

強い姿に隠れた弱さ４

現在午後１０時過ぎ、今夜は早めに仕事に出たから他の魂接を切って一人天に送ることができた。この地球で一日に何人の人間が死んでるかなんて考えたくはない。ただ僕は死んだ人がいたら魂接を切り、それを千人まで数えればいい。

今日は病院の中に入ってみようかと言うことで病院内に潜入することにした。

でっかい鎌を持って真っ黒なトレンチコートを着ている。眼鏡は掛けていない。そんな僕はどう見ても不審者だろう。死神化すると普通の人間からは見えなくなるという能力がなければこんなこと絶対できない。

「…冬夜、あまり現世に干渉しないように」

「わかってる。それが死神のルールってやつだし」

「ならいい…」

伊藤…伊藤…伊藤富子っとあった。誰か来てくれないかな？誰かが開けてくれないと病室に入れない。僕が開けるとポルターガイスト現象になってしまうから。

ガラッ…。

上手い具合に中から人が出てきた。白衣を来た初老の医者とその後ろを大人が二人。たぶん伊藤先輩の両親だろう。

なんか難しそうな表情をしている。けっこう危ない感じみたいだな。

開いたドアの間から入っていくと無機質な空間が広がっていた。
白いベッドには目を閉じて横たわっているチューブまみれの伊藤富子。そして、その傍らには伊藤先輩が立っていた。

チューブが出てるいくつもの機械がベッドを取り囲んでいる。
いっそのこと大鎌で全部壊してしまおうか。現世側からの干渉は不可能だがこちらからの干渉は可能だ。
上手く壊せば伊藤富子が死んでも病院側の整備不良。そうすれば伊藤先輩の家族が気に病むようなことはなくなる。
自然と鎌を握る手に力が入った。

「冬夜…変なこと考えちゃダメ」

「わかってるさ」

いくら僕だって本気でそんなこと考えているわけじゃないさ。それに僕は死神の代理人。代理人とは他人の代わりをする者。ロキ本人の意思に外れたことはしない。
今は一応様子見ってところだな。僕は乳白色の壁に背中を預けた。

伊藤先輩は自分の祖母を見下ろすように立っていたがしばらくすると椅子を引いて腰掛けた。彼女にいつもの余裕は無く、ただベッドを見下ろしている。

耳元で“もう楽にさせてやれ”と囁き掛けたら決めてしまうだろうか？回復の見込みがないのは事実なんだし、背中をひと押ししてやれば先輩も決断するかもしれない。これぞ死神の囁きってな。
不謹慎ながらも自然と笑えてしまう。

「お婆ちゃん。今日…後輩に情けないことを聞いてしまったよ」

ゆっくりとした口調で話し掛けるように先輩が話し始めた。

「人の命の選択を迫られた時にどうするか……私も何を考えていたのか。まったく関係無い他人に選んでもらおうとするなんて私らしくない」

先輩は無理に笑顔を作って苦笑してみせた。

「そのうちの一人に言われたよ。生きるってことは受け入れることだって。人生で起きたことを受け入れることだって。たとえそれが辛いことでも……。でも、私は逃げた…」

先輩の声が少しずつ掠れていった。小刻みに肩も震えている。

「現実から目を背けた…。こんなの絶対に認めたくなかった！お婆ちゃんがいなくなるかもしれないっていう現実から逃げたい！選びたくない！選べない！そんな…そんな弱い自分が許せないんだ…！」

今まで溜めていたものを一気に吐き出すように先輩は叫んだ。

彼女の頬を涙が伝う。

いつもは凛として隙の無い人だけど、本当の先輩はこっちなのかもしれない。

祖母想いのか弱い女の子。完璧に見える先輩は周りが作り出した幻影だ。今の先輩はただの後輩である僕なんかが見てはいけない一面の先輩なんだろう。

ましてや涙を流す姿なんて論外だ。

今日は帰ろう。

「……」

誰か開けて。

帰れない。

ポルターガイスト現象防止のためにドアを勝手に開けられない。

ドアの前であぐねいていると後方からカタッと音がした。先輩が立ち上がったみたいだ。

「お婆ちゃんは昔私に言ったよね？誰よりも強い子になれって…。無理だ…なれっこない！」

勢いよく病室から飛び出していく伊藤先輩。引戸構造のドアがゆっくりとしまっていくところをすかさず通り抜け…られなかった。

またしても出られん。

仕方ない。深夜になって他の人が眠るのを待つか。

『…い……おい…』

さて、何か聞こえたみたいだけど気のせいかな？

『おい、君…そこの君』

「冬夜…呼んでる」

ロキが反応してる。やはり呼ばれているようだ。

辺りを見回すと伊藤富子が眠るベッドの上。そこに青白い光を鈍く

放つ人影があった。
二十歳くらいの若い女性。膝から下が伊藤富子の身体で隠れてしまっている。
魂が体と完全に離れないと魂接は切れない。
なんとなく見たことあるような、誰かに似た面影があるような感じがした。
そうだ、伊藤先輩に似ているんだ。
『ふふっ、やっと気づいてくれたか。前々から君が来てくれていたことは知っていたよ。こうして話がしたかったんだ』
「ロキ、どうなんだろ？」
「…あれは魂。伊藤富子の魂が少し離れた状態。人間が言う幽体離脱。関わっても問題ない」
なら深夜になるまでの暇潰しで話を聞くのも悪くないだろう。
「伊藤…富子さん？僕は…」
『死神さんだね？違うとは言わせないよ』
「え……ぁ…ああ」
『正直でよろしい。少し私と話をしてくれないかい？なぁに、寂しい老人のちょっとした興じさ』
「いいけど」

なんとなく言動や仕草も先輩に似ている。間違いなく先輩の祖母のようだ。

『不様だろ？好き勝手に生きてきた私がこんな姿になってまで生き続けている。我ながら情けないな。もう十分人生を往生したつもりなのに』

伊藤富子はベッドで眠っている自分を見ながら言う。

『でも、そんな私でも生きてて欲しいと願ってくれる子がいる。私のためなんかに涙まで流してね。なんというか、忍びなくて…』

腕を組み目を細めた彼女は哀しそうな顔をした。凛としつつも哀愁漂わせるその姿はますます先輩に似ている。

『私があの子の足枷になっているようだ』

「まあ、彼女はああ見えて弱いところがあるみたいだしな」

『そうだ。気丈に見えるが決してあの子は強くない。でもほとんど人に頼ろうともしない。今日、後輩に相談事をしたって聞いた時はビックリしたよ』

相談というよりは質問みたいな形だったけど。

『私はあの子に強い子になれとは言った。だが、決して一人でという意味なんかじゃない。人は一人で生きていけるほど精巧にはできていないんだ。君はどう思うかね？』

「どうだかな。難しいことは考えたくないんで」

『つれないなぁ。要するに私が言いたいのはもう私のことであの子が悩むのを見たくないってことだ』

「言ってることが繋がってなくて支離滅裂だ」

『ははははっ、私の悪い癖だよ。許せ』

屈託の無い笑顔は老人だという事実を忘れさせる。
魂は体という器に入った中身だ。器は古くなるけど魂は古くなることはない。それゆえに霊体が若さを保ったままの姿でもなんら不思議はない。
ちなみにロキが言うには見た目の若さは本人の意志でどうにでもなるらしい。
つまり伊藤富子の意識的年齢は実際より随分若いことになる。

『君は…あの子の言う後輩君になんとなく似ている気がする。よく話してくれるんだ。お気に入りの後輩らしいよ。ホントに普通の奴で、でも何か隠していそうで、そして決して誰にも思い通りにはならない。そんな面白い後輩らしい』

あの人はどんな説明をしてるんだ。言い換えればわけのわからない後輩じゃないか。

『そんな後輩君に似ている君にお願いがある。無理なことは承知だ。私を殺せ』

「イヤだ」

『それが君の仕事だろ？私はもう孫が泣く姿を見たくないんだよ』

「勘違いするな。僕の仕事はあんたが死んでから始まる。それに残された奴の気持ちはどうでもいいのか？今の時代、いきなり死んだら納得しない人間ばかりなんだぞ？」

『私は我が儘なんだ。もう十分生きたよ。私を死なせられないなら君があの子を納得させてやってくれ。そして決めさせろ。君になら任せられる。では、またな死神さん』

伊藤富子はそう言ってさっさと消えてしまった。
まったく、簡単に言ってくれるよ。人の苦労も知らないで。

さて、これで今回確実になったことがある。やっぱり先輩が祖母の生死の選択を迫られている。
先輩は相当なお婆ちゃん子だったのかもしれない。だから先輩の家族も先輩に委ねたといったところか。

ダメだなぁ。
あんまりこういう好きじゃないんだよなぁ。誰かに世話を焼くなんてこと。
でも、しなきゃならないんだろ？
それが死神（代理人）であり人間でもある僕がだけができる特別なことなんだからさ。

次の日、僕は先輩の下駄箱に一枚の紙切れを入れた。

強い姿に隠れた弱さ5

初夏の日差しが降り注ぐ昼休み。
僕は体育館裏に来ていた。日差しを避けて涼しい建物の影に。

自分でもベタだと思うのと少しの不安。僕が誰かを呼び出すなんてことはもう無いだろう。本来そんなことする必要なんてないし。何より恥ずかしいし。

まあ、ここなら何をされても構わないし。誰にも気づかれないのが重要だ。

「おや？誰かと思ったら君だったのか」

僕が呼び出した人。
伊藤先輩が颯爽と歩いてきた。名義はしてなかったから来てくれるか心配だったが徒労だったみたいだ。

「伊藤先輩、来てくれて嬉しいですよ」

「ふふっ、今日は委員会の仕事がないからな。せっかくの呼び出しを無下にする必要も無いだろう？」

風になびく黒髪を押さえる先輩はこれ以上ないほど大和撫子の言葉が似合う。
やはりさすがは孫。若かりし伊藤富子とそっくりだ。

「私としては色恋沙汰か喧嘩沙汰のどちらかで呼ばれたと思っていたんだが。君のことだ……これが果たし状ではないのと、ましてや

恋文でもないのだろ？」

「話が早くて助かります。もちろん僕は別に先輩を理由も無いのに恨んではいないし、先輩に対して特別な感情を抱いているわけでもありません」

「後者の方はそうはっきり言われると傷つくな…」

先輩は苦笑していた。

僕がこれからしようとしていることを実行すれば苦笑するだけではいられないはずだ。

怒り狂うかもしれない。

だからわざわざ人目の無い体育館裏に場所を指定したんだ。

殴られるかもな。

「先輩が昨日聞いてきたことについて考えました」

「そのことか。私は忘れてくれと言っておいたはずだが…」

「なに余裕ぶってるんですか？追い詰められてるくせに」

「――っ！？」

先輩の眉が動いた。

表情には表れてないが、確実に動揺している。

畳み掛けるか。

「なにかですね、先輩の質問はバカらしいんですよ。人が死ぬか生きるかを選ぶってことでしょ？そんなの人間が決めることなんかじゃないんですよ。いえ、人間なんかが決めてはいけないことなんで

す」

「柳瀬君の言っていることの意味がわからない。つまり何が言いたいのかな？」

「だからですね、伊藤先輩ごときがそんなくだらないことを悩む必要は全然無いってことですよ」

パシンっ！

頬に痛みが走った。

先輩の平手が炸裂したみたいだ。おかげで眼鏡が地に落ちてしまった。

だが、これも予測の範囲。

顔を上げると先輩は肩を震わせていた。

怒ってるのか戸惑ってるのか。もう余裕は無くなっている。

「君が…君が言いたいことはよくわかった。私はもう行く」

「わかってない！」

とっさに立ち去ろうとした先輩の腕を掴んだ。彼女の足が止まる。

ここで逃がすわけにはいかない。

「先輩は何もわかっていませんよ。死というのは誰にでも平等にやってくる。先輩にも、僕にも！それが受け入れられませんか？死を受け入れられませんか？それなら先輩に悩む資格なんてない。あんたに生死を選ぶ権利なんてない！」

「じゃあどうしろって言うんだ！私の我が儘でお婆ちゃんは延命処置を施されている！苦しいのだって分かってる！でも…でも私はどんな姿でも…ぐすっ…お婆ちゃんにぃ……ぐすっ…お婆ちゃんに生きてて欲しいんだァァァ！」

先輩は僕の腕を力強く掴みながら膝から崩れた。大きな目から大粒の涙が流れ出していた。

「お婆ちゃんは本当の私を見ていてくれたんだ！周りが評価する偽りの私じゃなく弱い私を見ていてくれたんだ！お婆ちゃんは私の唯一の理解者だ…ぐすっ…ぐすっ。お婆ちゃんの強くなれって言葉のおかげで…ぐすっ…私は強くなれた。私はそんなお婆ちゃんを失いたくないんだぁ！」

「でもその人は今の悩んで苦しんでいる先輩の姿は見たくないはずです」

「はっ……！！？」

「強くなれっていうのは無理に気丈に振る舞うことでも腕力をつけろってことでもない。人として強くなれってことなんじゃないんですか？」

僕の腕を握る先輩の手はか弱く震えていた。顔も涙でくしゃくしゃ。こんな先輩他の人には見せられないよなぁ。

僕はできるだけ優しく先輩に微笑みかけた。

「伊藤先輩が強いだなんて思っていません。僕は先輩のありのまま

をわかってあげたい。だから言います。まだ先輩は高校生じゃないですか。人の死をホントに理解できるわけがありませんよ。まだそこまで強くなんて成長できない」

「ぅ…ぁ……ぐすっ…」

「死ぬとか生きるとか、そんな難しいことは大人に任せちゃいましょう。先輩が本当に強くなれるその日までは…」

潤んだ瞳で上目遣いの先輩はマジでヤバい。こっちがすごく照れてしまう。

「ぐすっ…ぅ…ふっ…ふふふっ…。君はやっぱり眼鏡取ると可愛い顔をしてるんだな」

「あの…急に何言ってんですか？」

「いや…はぁ、君に教わるとは私も情けないなぁ。でも、君のおかげで重い荷がやっと降ろせた気分だ」

「どういたしまして」

「柳瀬君…」

先輩がそっと僕に抱きついてきた。

柔らかくてそしてシャンプーの甘い香りがする。

ん…？ちょっ…こ…これは…すごいことになってるんじゃないか？

浅井の言うフラグ立ち？

「本当に…ありがとう…」

顔から火が出そうなくらい身体中が熱くなった。だから“はい”…

と、答えるだけで精一杯だった。

そして――その夜。

「それじゃあ優子、いいんだね？」

伊藤先輩の父親が優しい声でそう訊ねた。

「うん、父さん達がいいと思う方に…あっ、やっぱり一つだけお婆ちゃんに言わせて」

先輩の父親は小さく頷いて先輩を促した。

「お婆ちゃん、ごめん…そして今までありがとう。私きっと強くなるから」

「じゃあ、先生、お願いします」

白衣を着た初老の医者は頷き、ゆっくりと機械の電源を切っていく。

最後には心電図にピーッという音が鳴り響いた。

『よくやってくれたよ。君ならなんとかしてくれると信じてた』

完全に身体と分離した伊藤富子の魂が僕にそう言ってきた。

もちろん魂接はまだ付いたまま。

そういえばまた若かりし時の姿だな。

「まあ仕事なんで…」

『なんでもいいさ。あの子の晴れ晴れとした顔が見れて私は大満足だよ。これで安心して逝ける。さあ、死神さん、君の務めを果たしなさい』

「わかった。魂接を切らせてもらうよ」

大鎌を振りかぶって魂接を思いっきりぶった切った。これで任務完了だ。

『ふふっ、死ぬ前に君に逢えて良かった』

伊藤富子の魂が光の粒となって少しずつ消えていく。天に召されていく瞬間だ。

『孫も言ったんだし、私も君に言わなければな…。本当にありがとう。私のことにしても優子のことにしても本当に感謝している』

「ああ…」

『これからも優子のことよろしく頼むよ死神さん』

「死神にそれは無理だ」

『じゃあ言い改めよう。優子のことを支えてやってくれよ後輩君。じゃっ！』

完全に光の粒が舞い飛び伊藤富子は成仏した。

なんだ…あの人、僕が先輩の後輩だってこと、はじめから知ってた

のか。
意地悪い性格してるよホントに…。
「冬夜…やった。さすが」
「やめろよロキ。いつもと変わんないよ」
こうして僕の死神としての仕事がまた一つ終わった。
伊藤富子
５月２３日
享年８９歳で永眠。
死神ロキ
天に送った数８６人

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7190s/

死神の代理人やってます

2011年5月12日01時06分発行